

「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究 (3)

— 3年間の継続研究を通してモデルシラバスの提示を行う —

A Research on Educational Institutions for Childcare Training in the Child Rearing Support Program (3)

— A Model Syllabus is Shown Based upon Continued Research for Three Years —

福井逸子*¹ 小栗正裕*² 柴田智世*³ 瀧川光治*⁴

Abstract

This continues research from the previous paper entitled “A Research on Educational Institutions for Childcare Training in the Child Rearing Support Program (1).”

In this research “event type” offers play experience to the parents and child. “Salon type” offers an open space experience for parents and a child. Both options were taken from measured examples for child rearing support programs in childcare training schools. Consideration and analysis were determined based upon student’s recorded reflection. The results clarified the educational effects of each program. In the final stage a model syllabus was created and carried out implementing the “new childcare exercises” based on this research.

キーワード：子育て支援力／ひろば（サロン）型／親子遊び（イベント）型／モデルシラバス／
保育士養成

I はじめに

2010年7月13日、現行の『保育所保育指針（以下・指針）』（2008年3月・厚生労働大臣告示）の告示を受けた保育士養成課程の改訂がいよいよ告示され、2011年度の入学生より適用されることとなった。その新しい保育士養成課程では、講義科目である「家族援助論」が「家庭支援論」に¹⁾、演習科目である「社会福祉援助技術」が「相談援助」²⁾に変更されるほか、新たに演習科目として「保育相談支援」が新設されることとなっている。

保育士養成課程改訂の告示に先立って2010年3月22日に厚生労働省の「保育士養成課程等検討会」（座長・汐見稔幸白梅学園大学学長）により公表された中間まとめ³⁾では、保育相談支援の新設について、児童福祉法第18条の4に定められた保育士の「保護者に対する保育に関する指導」について具体的に学ぶことが重要であるためとしており、指針第6章の内容を踏まえ、保育実践に活用され、応用される相談支援の内容と方法を学ぶこととしている。その指針第6章では、子育て支援について、「保育所に入所している子どもの保護者に対する支援」と「地域における子育て支援」に区分して記述されている。特に後者については、「地域の子育ての拠点としての機能」として、「子育て家庭の交流の場の提供及び交流の促進」が挙げられており、指針の解説書にはその活動場面として、親子遊びや食育などの育児講座や体験活動なども挙げられている。

*¹ FUKUI, Ituko
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
乳児保育・保育内容

*² OGURI, Masahiro
久留米大学 文学部 社会福祉学科

*³ SHIBATA, Tomoyo
愛知学泉短期大学 幼児教育学科

*⁴ TAKIGAWA, Koji
関西国際大学 教育学部 教育福祉学科

これらの活動を展開するためには、従来の保育者養成で行われてきた「保育力」の育成だけでは十分でなく、それを基盤とした「子育て支援力」の育成が必要となってきたことについては、すでに述べた通りである（福井ほか、2009）。保育者となるための基礎的な資質や、基盤となる「保育力」については保育者養成課程全体を通して行われるところが大きい。「子育て支援力」についても知識理解にかかわる部分は各種の講義・演習を通して育成が図られるものと考えられる。しかし「子育て支援力」の育成にあたっては、現場とのかかわりの中からでしか学ぶことができない部分もまた大きい。

今回の保育士養成課程の改訂により、「教科目の教授内容⁴⁾」として選択必修科目である「保育実習Ⅱ」に子育て支援にかかわる内容も盛り込まれることとなった。しかし、保育実習では指導計画やそれに基づいた子どもの保育、その他、保育士の多様な業務についての実習も含まれており、それに加えて子育て支援の計画や実践など十分な内容の実習を10日間という限られた時間の中で経験することは、はなはだ困難であると思われる。これとは別に、子育て支援力育成のための演習または実習の機会の設定が必要である。

これまでも、すでに数多くの保育者養成校において、学生の参加による子育て支援活動に取り組まれてきた。しかし、そのプログラムの作成にあたって教職員が主導する場合もあり、学生主導の場合には内容が、製作活動やふれあい遊びなど、親子遊び（イベント）型のものとともに、絵本・紙芝居・劇・オペレッタなど、学生が演じ参加者が見るというショー型のものが多くなる（福井ほか、2009）。このような場合、参加者である親子と学生のかかわりは、特にショー型の場合にはステージと客席に切り離されてほとんど無いか、あっても非常に限定的なものになると思われる。子育て支援力の育成のためには、保護者にかかわり適切に関係を構築する力を育てることが欠かせない。そのためには演習科目等でのロールプレイなどによる相談援助場面の擬似的な体験に加え、相談援助場面ではないにせよ実際に保護者とふれあい、その姿や思いに触れる体験も必要となる。

筆者らは、2007年度から2009年度まで、北陸

学院短期大学共同研究費（当時）、北陸学院大学共同研究費による助成を受け、「保育者養成校における子育て支援のための教育のカリキュラム開発に関する研究」を継続し、サービス・ラーニングの視点より学生によるひろば（サロン）型子育て支援への関与観察と振り返りの実践の積み重ねを行ってきた。その学生の振り返りより、自分と保護者との関係性への視点、あたたかいまなざしを向ける保育者の役割という子育て支援観の変容、親子関係を丁寧に見つめていくことの大切さや親子の背景などに視野を広げる必要性など、これまでの実習やボランティアではあまり見られなかった学生の学びが浮かび上がっている（福井ほか、2010）。このことは、学生が実際の親子、保護者の姿に触れることが子育て支援力に必要な学びにつながっていくことを示している。

とはいえ、これまでの取り組みを通して、ノンプログラム型のひろば（サロン）型子育て支援への参加が、未経験の学生にとってはいささか困難と戸惑いを伴った事実も感じざるを得なかった。一般に養成校で行われることも多い、親子遊び（イベント）型の子育て支援はプログラムに沿った進行という意味において学生にとってイメージしやすく、取りかかりやすいことも事実である。しかしながら、保護者とのかかわりは限定的ではあっても期待することもできる。

本稿においては、このような経緯と関心をもとに、親子遊び（イベント）型の取り組みについても取り上げ、そこでの学びとその視点についての考察を行う。また、これまでの研究で取り組んできたひろば（サロン）型子育て支援の振り返りを行い、その期待できる学びとその視点についての検討を行う。そして、それらをもとに学生の子育て支援力育成のための学びの経験の積み上げのあり方について検討を行い、試案として「子育て支援演習」のモデルシラバスと振り返りワークシートの作成を行い、提示をすることとしたい。

Ⅱ 親子遊び（イベント）型子育て支援の実践—養成校における実践例から

1. 親子遊び（イベント）型子育て支援とは

A 短期大学では、2006年度より「親子ふれあ

いタイム」として、七夕まつり、クリスマス会などの季節の行事に地域の子育て家庭 25～30 組を招待して、親子と学生がかかわる機会を持つような子育て支援活動を年に数回行っている。

A短期大学以外にも多くの保育者養成校においての実践がなされている。滋賀女子短期大学の地域子育て支援事業（古橋，2006）、常磐会短期大学のように特定の幼稚園・保育所の保護者を対象にして行われるもの（卜田ほか，2006）、長野県短期大学での実践（立浪，2009）、学生に遊ぶ力を身に付けることを目的として行われるもの（豊田，2010）等のような実際に地域の親子とかかわる体験を設け、学生自身がプログラムの計画・準備・実施・反省と評価するという過程を経て、子育て支援を実践する取り組みが増えている。

ここでは、学生自身が活動内容を立案・計画し、準備や当日の運営、反省と評価を行い、親子遊びのイベント内容をプログラムする形態をとっているものを「親子遊び（イベント）型子育て支援」と呼ぶこととし、A短期大学の実践と振り返りを通し、知見を得ることとしたい。

2. 親子遊び（イベント）型子育て支援の目的

A短期大学では、地域の親子に、学生がさまざまな遊びの機会を提供することを通して、保育者養成校としての地域貢献を行い、学生の「基盤となる保育力」の向上、コミュニケーション能力の向上を図っている。そして、親・子の二者関係の中に学生が加わり、三者の関係を築いていくことを通して「保護者にかかわり、適切に関係を構築する力」の習得に向けた基礎的な体験をすることを目的として取り組んでいる。

3. A短期大学における親子遊び（イベント）型子育て支援の実施内容と運営の流れ

(1) 実施内容：七夕祭り、収穫祭（いも掘り）、クリスマス会、節分、ひな祭り等の行事（90～120分）を実施し、その具体的なプログラムとして大型絵本・紙芝居・ペープサート・手袋シアター・人形劇・器楽合奏等の実演、製作、身体を動かす遊び、表現遊び、集団遊びなどから3～5個を選択し、学生が遊びや活動を企画し、実践を行う。
(2) 運営の流れ： おおよそ図1の通りで、PDCAサイクルの過程を学生自身の実体験として

経験することができるようにしている。

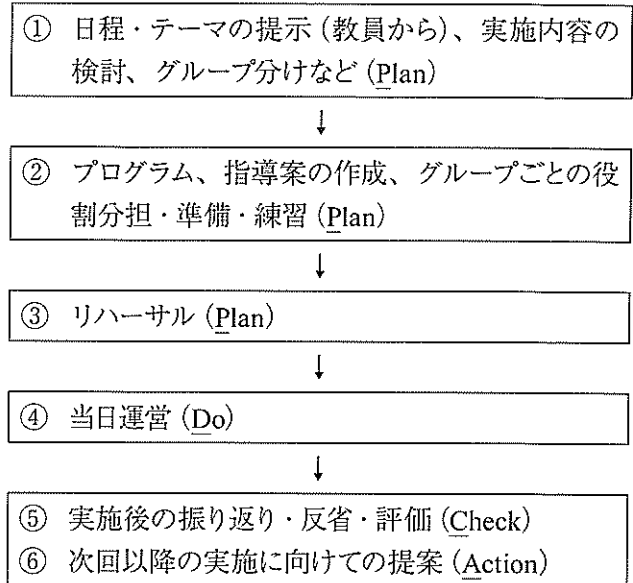


図1 運営の流れ

4. 親子遊び（イベント）型子育て支援の効果と考察

経験が少ない段階の学生による振り返りの中には、「計画・準備の大切さ」「協力して相談や分担しながら進めることの大切さ」という自分たちの実施内容についての言及が多いが、経験を重ねるにつれ、「親子関係の理解が深まった」「子どもに積極的にやってもらいたいのに、親の方が先取りしてやってしまうこともある」と親子関係についての言及も少しずつ増えてくる。

保護者が子どものそばにいて、子どもだけを対象にして実施するだけではない難しさを感じる一方、親子のやりとりを見ることによって、親子の関係性について理解を深めることができると考えられる。

このような親子遊び（イベント）型子育て支援活動後に挙げられた学生の反省と評価の一部を抜粋すると、次のようであった。

・製作（鬼のお面作り）では、製作用の材料を机の上に並べるタイミングの判断^①に迷った。
・製作用テーブルを十分な数を用意したと思っていたが、子どもの間に保護者が入ったので、大変窮屈であった。そのため、私たち学生が机間巡視をすることができず、少し離れた位置から親子の様子を見守ることになってしまった。製作に関して子どもとのか

かわりを持つことがあまりできなかったように思い、反省している。

- ・リズムダンスの時に、隣の子と2人組になって手をつなぐ部分があるが、子どもの年齢が2～3歳児がほとんどで、子ども同士の関係性が希薄なため、手をつなぐことができないということが分かり、大変困った。②代わりに別の動きを提案するなど、臨機応変な言葉かけができていたら、ダンスが途切れることなく楽しめたと思う。
- ・開始前の準備で、子育て支援会場に、赤ちゃん用のベッドとままごと用の畳を運んだが、こんなに小さな子どもが来るのかと思っていたが、下の子どもを連れて来た母親が、ベッドに寝かしたり、ミルクを与えていたりしていたのを見て、私は参加の申し込みをしていた上の年齢の子どものことしか頭の中になかったのだと反省している。③

以上の学生からの反省事項に対しての考察を述べていきたい。

まず、下線①であるが、「製作用の机に、最初から製作材料を置いておくと、子どもが触ってしまうだろう」という予想をした学生が、製作が始まると同時に材料を環境設定しようと計画をしていた。しかし、実際その場面になるとそのタイミングが難しかったようである。このことについて、反省会時に改善策を尋ねたところ、ある学生から、「進行役(司会者)と連携をとり、進行役から一言、『今からお姉さんたちが材料を配るから待っていてね。』と言えば、待機している学生への指示として伝わったと思う。」という意見が出された。

下線②については、学生は子どもたちに、隣の子と手をつなぎましょうと言葉をかけることによってそれに従うだろうと予想していたようであった。予想される子どもの姿と、実際のそれとにかなりの差があることに気付いている。また、このことによって、これまで楽しんできたダンスが途切れてしまい、流れが中断してしまったこと、そこで臨機応変な援助ができなかった自身の未熟さにも気付いている様子である。

下線③では、赤ちゃん用のベッドと畳を設定することを提案したのは教員であった。申し込みのあった子どもの年齢を見ると、2～4歳がほとんどで、まだ歩くことのできない乳児は含まれていなかった。そのため、学生はそうした提案に多少

の違和感を持っていたのだと思われる。しかし当日は、下の子どもを同伴している親子が数組おり、ベッドと畳を利用している姿を見て、学生は参加希望の子どもだけでなく、その親がどのような状況であるかを予想・判断して準備をすることの大切さを学んだようである。

また、各イベント終了時に保護者に記入してもらったアンケートでは、保護者からのいくつかの率直な意見や要望が出された。

- ・音楽遊びでBGMを流して欲しい。
- ・製作の際に、作り方の説明をして欲しい。
- ・ダンスの二人組になる際に、ペアがなかなか組めずに困っていたので、配慮をお願いしたい。
- ・参加費が多少かかっても構わないので、おやつのある時間があると有難い。

こうした意見は、学生にとって大変貴重であり、自分たちの実践を振り返る上で大きな役割を果たすひとつの要素となっている。特に、学生は指導案通りにプログラムが進んだか、行うことができたかという点について関心が向きがちであり、子どもの動きよりもむしろ自分たちの動きや、担当として自分たちが与えられている持ち場での責務を果たすことができるかどうかという点に意識が向きがちである。

しかし、学生が気付くことができなかった点に関して保護者からの第三者的な視点から評価をもらうことにより、多角的かつ、より入念な評価となると考えられる。保護者は、我が子の活動の様子や動きを他児と比べることも含めて細かに観察しており、子どもにとってその活動がいかなるものであるかを常に見ている。そこから、学生自身では気付かなかった部分を評価することができる。それらは、学生が保育者の卵として、これからは成長して行ってほしいという願いや励ましの言葉を含んでおり、学生の多少の至らなさもおおらかに見守ろうとする意味も込められていると思われる。(保護者からの学生への褒めの言葉は、本稿では割愛する。)

親子遊び(イベント)型の子育て支援を通して、学生は親子のやりとりを観察することができるが、日常の親子の姿というよりはむしろ、イベントでの活動場面という、普段とは違う非日常的な環境を設定した上での子育て支援であると言え

よう。そのため、親が普段抱えている、生活の中での悩み事や気になっている事柄などについての質問や雑談を、学生に対して持ちかけることは考えにくい。しかしその点については、ここでは保護者も学生に対しては「子どもと一緒に遊んでくれる優しいお姉さん」という思いで見えており、そのようにかかわってくれることを期待しているものと思われる。そう考えるならば、学生に対する保護者の必要性（ニーズ）は、親子遊び（イベント）型の子育て支援において十分に満たされているとも考えられる。

Ⅲ 養成校と子育て支援現場との協同的实践

—ひろば（サロン）型子育て支援広場への参加

1. 実践の概要と研究の方法

2009年10月中旬から12月初旬の期間、3年次（当時）に在学する編入学生10名を毎週月曜日9時半から12時まで、大学近隣の保育所が運営する子育てひろば（サロン）に参加させ、そこで参加者の親子や子育て支援担当保育士とかわかった経験をエピソードとして記録する作業を行った。当時3年次の編入生は、全員が実習及び保育現場での経験が1年以上ある学生達で、この作業を行うにあたって、それぞれが視点をもって関与観察に臨むことが、後でエピソードを記述する際には、役立つだろうと考えた。そこで、それぞれが自ら観察の視点を選び、子育てひろば（サロン）への参加を行った。

- ① 親と子
- ② 保育者（担当保育士）と保護者
- ③ 保護者と保護者

これは、あくまでも学生自身が希望した視点であるが、この中には、自分自身を対象にしたものが含まれていなかった。例えば、私と保護者、私と子どものように、直接保護者や子どもとかわるという視点は除かれていた。これについて、学生側の意見をまとめると、まだ学生という立場にあり、保護者と信頼関係を築いていない場所において、直接かわっていくことは、非常に困難と共に勇気のいることであるということであった。したがって本研究の場合は、関与観察というよりも参加観察として定めておいた方が適切であると

いえるだろう。

3. 学生の振り返りからの考察

本研究では、D保育園の親子サロンにおいて、10名の学生が参加観察と記録を集積した。その後、学生自らがそれぞれ経験した内容について振り返る作業を行った。本章においては、学生の記述した振り返りシートから「子育て支援」にかかわる体験的な学びが学生の中でどのように理解され、今後どのように発展していくべきかについて考察していきたい。

A子の事例（振り返りシートより）

今回の実践の中では、親側のニーズがあまり分からなかったので、子育て支援について満足しているのか知りたいと思った。また、担当保育士が一人ひとりの母親に対して、どのような細やかな援助をしているのか、ケース別で見たいと思った（原文のまま）

B子の事例（振り返りシートより）

学生としては、様々な子育て支援の場に足を向け、様々な支援を知る事が大切だと思った。実際に保護者と関わり、普段どのような事で保護者の方は悩んでいるのか知ってみることが今後は、必要だと思う。（原文のまま）

上記の振り返りを読み取ると、学生自身は、実際の子育て支援の現場において、直接的な体験をすることに意義を感じているものの、今回のようにわずか2カ月半という短い期間では、保護者自身のニーズを知るまでに至らず、中途半端な学びのままに終わっているように感じられる。しかしながら、今後各自が子育て支援をどのように展開していくべきかという自己課題を持てている事に対しては、短い期間ではあるものの次の学びに繋がる重要な体験であった事が理解できる。A子の事例にあるような、保育士の個々の保護者に対する援助の仕方を知るといふねらいは、ソーシャルワークの一環としても位置づけられるものだが、今後の子育て支援における相談援助の役割の重要性を学生自身が感じ取っている事について注目したい。このような相談場面における同席・観察については、クライアントのプライバシーにもかかわってくるので、実践には慎重でなければならな

い。しかし、保護者と保育者の日常的な何気ない会話の場面においても、相談援助につながる会話が含まれることも大いにあるので、このような何気ない会話にも耳を傾けていくよう、常に気を付けていく必要があるだろう。もちろん、この場合、学生には守秘義務について徹底しておかなければならないことは言うまでもない。

C子の事例（振り返りシートより）

授業も大切だが、直接見て学び得るものは鮮明に残ると思うし、知識になると思う。やはり、色々な「子育て支援」を直接みるのだと思う
(原文より一部抜粋)

D子の事例（振り返りシートより）

講義の中だけで学ぶのではなく、実際に現場に見に行くことがとても大切だと思った。現場を見ることで新たな発見や気づきが出てくると思う。また、ひとつの場所だけをみるのではなく、それぞれの園や地域によって異なった支援をしていると思うので、複数の現場を見ることができたら良いなと思った。
(原文のまま)

上記の振り返りシートから読み取れることは、学生自身、ひとつの子育て支援の現場にだけ留まるのではなく、複数の現場を見て比較しながら自分なりの子育て支援のあり方について考えていきたいという思いが表れている。確かに、子育て支援は、保育所だけが請け負っている事業ではなく、市町村等の行政が中心となって行っている活動、ボランティア等有志を中心に行っている子育てクラブに称される活動、幼稚園が主催して行っている活動、個人レベルで草の根的に行われている活動など、現在は多岐に渡って展開されている。しかしながら、保育所は早くから地域の子育ての拠点として、子育て支援を担ってきた歴史がある。また、2004年度の保育士資格の改正以来、子育て支援を行うことが保育士の責務であると謳われている。

将来、保育所の保育士を目指していくならば、養成校における早い段階から、将来子育て支援を担うという自覚を持ち、理論的のみならず実践的な活動も含めて、長期的、多角的な学びをしていかなければならない。

E子の事例（振り返りシートより）

子育て支援の現場にいる人たちは、ひとつの役割として、私達学生に保育現場の現状や親子がどのようなニーズを持って、子育て支援に参加しているかなど詳細に伝えてほしいと思う。熱意のある学生は、興味や関心を持ち、それをきっかけとして、保育現場や社会に貢献する取り組みを始めるのではないだろうか。(原文より抜粋)

F子の事例（振り返りシートより）

今回、子育て支援に参加したことで、保育者は、親の悩みを少しでも軽くするために、多様な知識が必要だと感じた。親の悩みで多かったことは、「食事」や「病気」などの子どもに関するものであった。私は今このような相談を受けても答えることはできないと思った。だから、学生の間子どもに関する専門的な知識を学び、ファイルしておくなどしなければ、後1年後に保育者となった時、親に相談を持ち込まれた時でも答えられるようにしなければならない。(原文より一部抜粋)

上記の振り返りシートでは、学生が子育て支援の実践的学びを通して、現在の学生という立場の中であってどのように子育て支援と向き合っていくべきであることを示唆している。E子の事例からは、学生の段階から社会の一員として子育て支援に取り組むことの意義が感じ取られる。今日、社会のどのような場所においても、子育て支援は求められているという現状を学生時代に理解しておくことは、保育者になるという前提条件に限らず、社会人として歩み出す前に誰もが理解しておくべき事であるだろう。

また、F子は、子育て支援にかかわる保育士に着目しており、将来の自分自身と重ね合わせて意見を述べている。F子に類する意見は、子育て支援の学びを経験した学生からはよく聞かれるものであるが、現場に出たからこそ分かる理論の大切さ、それは、なぜ養成校で理論を中心とした学びを構築していかなければならないかということにも繋がる重要な気づきでもある。この事から考えると、子育て支援にかかわる実践的な学びは、保育の学びの集大成として位置づけるのではなく、その過程の中に位置づける方が良いのではないだろうか。過程の中に置いてこそ、学生のさらなる学びの意欲へも繋がっていくと考える。

4. 今後の課題

以上、ここでは学生の子育て支援に関する実践的な学びの振り返りから考察を行ったが、どの学生も一様に、実践的な学びに対する成果を心に留めており、そこから、自己課題や将来的な展望に繋げていることが理解できた。

しかしながら、学生が選んだ視点の中に自分自身が含まれていなかったように、最初から学生に積極的な関与を求めることについては困難と戸惑いを伴うことが問題点として挙げられる。学生の関与以前に、先行した体験と観察の積み上げの必要性が感じられた。

子育て支援の場における保護者と学生を視点とする関与観察等の先行研究には、東横学園女子短期大学(現・東京都市大学)子育て支援ひろば「びっぴ」の実践事例があるが、ここでは、約1年間の親と子を中心とした視点での観察、記録を経験した後、次年度から利用者の親子に対して、直接かわりながら観察していく関与観察が用いられている。学生自身の安易にかかわろうとする気持ちを抑えて、まずは、親子関係についてじっくりと外側から観察する期間を設けて次の段階に進んでいる。この事例から学ぶことができるように、今後は、子育て支援の場において、「保護者にかかわり、適切な関係を構築する力」の習得を最終的に目指しながらも、かわりの過程においては、どのような視点で観察を積み上げていくか、十分検討していく必要があるだろう。

IV 考察とまとめ

1. それぞれの取り組みの特徴

筆者らの研究(福井ほか, 2009)では、保育士養成教育段階での「子育て支援力」としては、「①基礎的な資質・姿勢・態度、および②基盤となる「保育力」の育成とともに、③「保育力」を基盤に「子育て支援」を実践する力」の養成が必要だと提案している。また、そのためには、授業と関連付けながら、「基礎知識」「態度・姿勢」「計画に基づく実践」「技術的側面」そして「子(親)とかわる力」をねらいとして学生主導で取り組んでいくことを提案している。

そこで、A短期大学の親子遊び(イベント)型子育て支援活動およびB大学のひろば(サロン)型子育て支援活動の取り組みについて比較検討すると、表1のように整理できる。

- ① 基礎的な資質・姿勢・態度については、基本的にどちらも学生の力を育てるのに資するが、「親子遊び(イベント)型子育て支援活動」では、学生がPDCAサイクルを通して協力していかなければならないため、「学生同士の協調の姿勢・態度」や「周りの意見と調整する力」の育ちが期待される。一方、「ひろば(サロン)型子育て支援活動」では、ひろば(サロン)に学生が入り込むため、「傾聴、受容、共感などの姿勢」や「守秘義務など倫理的姿勢」の育ちが期待される。
- ② 基盤となる「保育力」についても、基本的に

表1 タイプ別の子育て支援活動の比較

A短期大学の親子遊び(イベント)型子育て支援活動	B大学のひろば(サロン)型子育て支援活動
① 基礎的な資質・姿勢・態度	
<ul style="list-style-type: none"> ・身だしなみや言葉づかい。 ・学生同士の協調の姿勢・態度。 ・周りの意見と調整する力。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身だしなみや言葉づかい。 ・傾聴、受容、共感などの姿勢。 ・守秘義務など倫理的姿勢。
② 基盤となる「保育力」	
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに関する理解。 ・子どもとのかかわり方。 ・学生自身の「保育技術」と「計画立案とそれにもとづく実践」となどの力。 ・自らの実践を振り返り、反省・考察を行い、次回に生かす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに関する理解。 ・子どもとのかかわり方。 ・記録を取り、それらを整理・活用する力。
③ 「保育力」を基盤に「子育て支援」を実践する力	
<ul style="list-style-type: none"> ・親のかかわりの姿を観察し、そこにプログラムの内容を媒介としてかわる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育士の親・子へのかかわりの姿を観察しながら、かわり方について学ぶ。 ・親のかかわりの姿を観察し、その姿を基にしてかわる。

どちらも学生の力を育てるのに資するが、「親子遊び（イベント）型子育て支援活動」では、学生がPDCAサイクルを通して「学生自身の“保育技術”と“計画立案とそれにもとづく実践”などの力の向上」「自らの実践を振り返り、反省・考察を行い、次回に生かす過程の経験」が期待される。一方、「ひろば（サロン）型子育て支援活動」では、「記録を取り、それらを整理・活用する力」の育ちが期待される。

③「保育力」を基盤に「子育て支援」を実践する力については、「親子遊び（イベント）型子育て支援活動」では「親子のかかわりの姿を観察し、そこにプログラムの内容を媒介としてかかわる」経験を積み重ねるのに対し、「ひろば（サロン）型子育て支援活動」では「保育士の親・子へのかかわりの姿を観察しながら、かかわり方について学び、親子のかかわりの姿を観察し、その姿を基にしてかかわる」経験を積み重ねる。親子との実際のかかわりの姿を観察するという点では共通であるが、そこに子育て支援担当保育士が存在する「ひろば（サロン）型子育て支援活動」と、プログラムの内容が存在する「親子遊び（イベント）型子育て支援活動」では、「子育て支援の意味」について学ぶことの違いが生じる。

2. 実践による学生の学び

モデルシラバス構築の前提として、「親子遊び（イベント）型子育て支援活動」と「ひろば（サロン）型子育て支援活動」の実践において、学生の学びの違いを整理すると、図2、3のように提示できる。

「図2 親子遊び（イベント）型」においては、「親・子・学生」の三者関係が成立する背後に、「親子遊び（イベント）のプログラムの存在」がある。学生はそのプログラムを媒介にして親と子にかかわるという経験をする。そして、そのプログラムの計画立案から実践・振り返りといったPDCAサイクルには、教員とのスーパービジョン関係が存在する。教員の役割としては主としてPDCAサイクルのPの計画立案段階でのスーパーバイズ、C・Aの振り返り・次への課題発見段階でのスーパーバイズが主要な役割である。

他方、「図3 ひろば（サロン）型」において

は、「親・子・学生」の三者関係ではなく、「親・子・子育て支援担当保育士・学生」といった四者関係が成立している。これは、すでに「親・子・子育て支援担当保育士」といった三者関係が成立している子育て支援の場に、学生が入ることで新たな関係性が生じることになり、初回はそれまでの場の空気とは違うものが漂うが、その子育て支援担当保育士が「親・子・学生」のかかわりを含めてその場をコーディネートするからこそ「ひろば（サロン）型」が成立すると考えられる。また、学生にとっては、教員のスーパービジョン関係だけではなく、その子育て支援担当保育士とのスーパービジョン関係も存在する。そのため、子育て支援担当保育士とのスーパービジョン関係においては、学生が参加したときのその保育士のかかわりや親子のかかわりについて、スーパーバイズを受けることができ、教員からは記録を通しての振り返り・次への課題発見段階でのスーパーバイズを受けることができる。

すなわち、「親子遊び（イベント）型」と「ひろば（サロン）型」においては、実践による学生の学びの違いは、2つの要因が考えられる。1つは、プログラムの存在の有無、子育て支援担当保

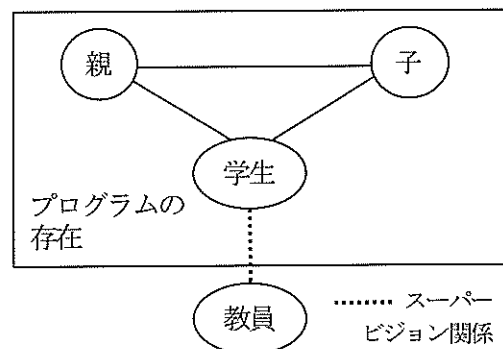


図2 親子遊び（イベント）型

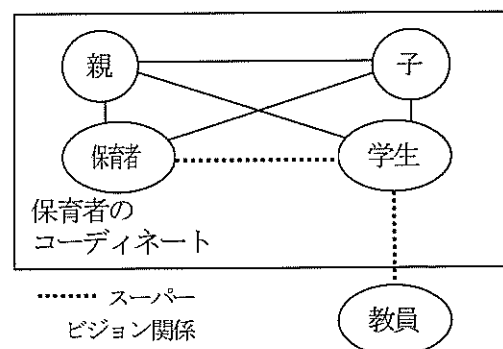


図3 ひろば（サロン）型

育士の存在の有無が、その学びの中身の違いにあらわれてくる。そして2つ目には、スーパービジョン関係が、「教員」のみか、「教員と子育て支援担当保育士」といった役割の違う複数の人間から得ることができるかによって学びの中身の違いがあらわれてくる。

そのように考えると、保育士養成教育段階での「子育て支援力」育成のためには、保育者を含めた視点の獲得のためにも、ひろば(サロン)型の取り組みが重要である。そのためには、学内でのみの取り組みで終わるのではなく、子育て支援の現場と連携した取り組みが必要である。それにより、地域の子育て支援の姿や実情の把握が可能となる。

3. モデルシラバス構築のために

以上を踏まえると、学生の「子育て支援力」育成のためには、保育士養成課程での「家庭支援論」「保育相談支援」等での子育て支援に関する知識、方法や社会背景等の理解を基盤に、実践による学びとして「親子遊び(イベント)型の実践から、計画の立案・実践・振り返りを行うこと」「ひろば(サロン)型の実践から保育士・親子のかかわりの姿を観察すること」の双方を学生自身が経験することが必要だと考えられる。

そしてまた、「親子遊び(イベント)型」と「ひろば(サロン)型」の順序性については、「親子遊び(イベント)型」を先に経験し、その後「ひろば(サロン)型」の経験につなぐようにしている。これは、図2や図3のように「三者関係の把握」と「四者関係の把握」を比較したときに、学生にとって学習の順序性として、「三者関係の把握」の方が容易であろうと考えられることと、振り返りとして記録を書く分量や内容において「ひろば(サロン)型」の方が深いものを求めたいと考えるからである。

そのことを具体的に新規科目「子育て支援演習」としてのモデルシラバスを提示すると、次のような案が考えられる。

【モデルシラバス案】

1) 開講時期

短期大学においては2年次通年科目、四年制大

学においては3年次以降通年科目

2) 履修前の学習が想定される授業科目

- ・保育原理：保育の基本、内容、方法の理解
- ・保育の表現技術：身体遊び、音楽、造形、言語、教材の理解
- ・保育者論：保護者支援、保護者との協働
- ・家庭支援論：子育て支援の意義、施策、体制
- ・相談援助：相談援助の技術、展開(ロールプレイ・事例検討含む)
- ・保育相談支援：保護者支援の方法と技術、計画、記録、評価など(ロールプレイ・事例検討含む)
- ・保育課程論：保育の計画と記録、評価
- ・保育実習Ⅰ：子どもとのかかわりの技術

3) 目標

- ① 地域の子育て支援の実践を具体的に学ぶ。
- ② 親子遊び(イベント)型子育て支援の実践、ひろば(サロン)型子育て支援の実践を通して、次のことを学び、身につける。「基礎的な資質・姿勢・態度」「基盤となる「保育力」を育成するために、自分たちで計画立案・実践、記録、整理・活用する」「「子育て支援」を実践する力を育成するために、「子育て支援の意味」「保護者とのかかわり」について理解を深める」
- ③ 実践の振り返りの過程により、物事を深く捉える視点と方法を学ぶ。

4) 授業計画

「子育て支援演習」前期は表2、後期は表3の通りである。

5) 学びの記録のために

ここでは、下記の図4、図5の2種類の記録用紙を想定している。

親子遊び(イベント)型子育て支援活動を実施する際には、PDCAサイクルのPとしてプログラムの立案(時間軸にそった活動の流れ)と、CとAの実践の振り返り・次への課題発見に重点を置いた図4の記録用紙を用いる。

ひろば型子育て支援活動を実施する際には、その場で学生自身が参与観察を行うことになるので、「四者関係を通じた気づき」「活動中のエピソードと感想」を記入し、さらに「子育て支援担当保育士」からのスーパーバイズも記録として残せるような図5の記録用紙を用いる。

表2 「子育て支援演習」前期シラバス

週	授業内容	詳細	課題
1	ガイダンス	身だしなみとマナー(服装、髪型、言葉遣いなど)	
2	親子遊び型子育て支援の実践1	全体説明、企画説明、役割分担	
3	親子遊び型子育て支援の実践2	イベント準備(グループ作業)	イベント準備
4	親子遊び型子育て支援の実践3	イベント準備(グループ作業)	イベント準備
5	親子遊び型子育て支援の実践4	イベント当日の進行・運営	
6	親子遊び型子育て支援の実践5	イベント当日の進行・運営	当日の記録
7	親子遊び型子育て支援の実践6	イベントについて振り返り	反省と感想
8	ひろば型子育て支援の実践1	事前学習(ひろばの概要および注意事項など)	
9	ひろば型子育て支援の実践2	ひろば型子育て支援への参加1 (次回までに教員の指導)	当日の記録
10	ひろば型子育て支援の実践3	ひろば型子育て支援への参加2 (次回までに教員の指導)	当日の記録
11	ひろば型子育て支援の実践4	ひろば型子育て支援への参加3 (次回までに教員の指導)	当日の記録
12	ひろば型子育て支援の実践5	ひろば型子育て支援への参加4	当日の記録・反省・感想
13	ひろば型子育て支援の実践6	ひろば型子育て支援についての振り返り	
14	全体の振り返りと気づき	中間発表会の準備	中間発表会の準備
15	まとめと総括	中間発表会	中間レポート

表3 「子育て支援演習」後期シラバス

回数	授業内容	詳細	課題
16	ガイダンス		
17	ひろば型子育て支援の実践6	事前学習(前期の振り返りと視点の明確化)	
18	ひろば型子育て支援の実践7	ひろば型子育て支援への参加5	当日の記録
19	ひろば型子育て支援の実践8	ひろば型子育て支援への参加6	当日の記録
20	ひろば型子育て支援の実践9	ひろば型子育て支援への参加7	当日の記録
21	ひろば型子育て支援の実践10	ひろば型子育て支援への参加8	当日の記録
22	ひろば型子育て支援の実践11	ひろば型子育て支援について省察	
23	親子遊び型子育て支援の実践7	イベントの企画・立案・分担	企画案および指導案
24	親子遊び型子育て支援の実践8	イベント準備(グループ作業)	イベント準備
25	親子遊び型子育て支援の実践9	イベント準備(グループ作業)	イベント準備
26	親子遊び型子育て支援の実践10	イベント当日の進行・運営	
27	親子遊び型子育て支援の実践11	イベント当日の進行・運営	当日の記録・反省・感想
28	親子遊び型子育て支援の実践12	イベントについて省察	
29	全体の振り返りと気づき	発表会の準備	発表会の準備
30	まとめと総括	発表会	最終レポート

それによって、学生自身の学びを記録し、教員からのスーパーバイズに重要な資料として活用することができる。

4. 今後の課題

本提案として改めて強調したいのは、学生の「子育て支援力」育成のためには、理論的な学びだけでなく、「親子遊び（イベント）型子育て支援活動」と「ひろば（サロン）型子育て支援活動」の両方を経験することが必要であり、そのためには保育士養成課程の既存科目ではなく「子育て支援演習」として新規の通年科目を設置することが必要であるということである。

しかしながら、本稿により提案したモデルシラバスは、実践を通して検証したものではなく、あくまでも共同研究者がそれぞれの学校組織の中で実践してきたもの、および過去3年間の継続研究を通して明らかになったことを土台に、理念的にはこのようなモデルシラバスが提示可能であろうと考えて提案したものである。

そのため、養成校によっては通年科目としてではなく半期科目としての実施、「親子遊び（イベント）型」と「ひろば（サロン）型」の実施回数の濃淡は、本提案をもとにして、検討することが必要であろう。また、本提案通りに、実践をしたとして、実際に学生の学びがどうであったかを明らかにしなければならないと考えるが、今後の課題として残されている。

さらに、授業としてこのような取り組みを位置づけるのであれば、学生の成績の評価をしなければならないが、その評価基準は、記録用紙だけでは不十分だと考えられるので、実際の取り組みについての態度特性をいかに評価するかという課題も残されていると思われる。

謝辞

本研究は、2009年度北陸学院大学・短期大学共同研究費による助成を受けたものである。

<注>

- 1 「保育士養成課程等検討会」中間まとめでは、「家庭、地域などを視野に入れた支援のあり方や支援体制について理解することが必要となっているため」としている。
- 2 「保育士養成課程等検討会」中間まとめでは、「社会福祉士等の養成等において、「社会福祉援助技術」が「相談援助」に改められたことを踏まえるとともに、保育との関連で相談援助の内容や方法について学ぶことが重要であるため」としている。
- 3 検討会では保育士養成等について継続した検討を行う必要性から「中間まとめ」としているが、実際にはこの「中間まとめ」をもとに保育士養成課程の改訂が行われている。
- 4 『指定保育士養成施設の指定及び運営基準について』（厚生労働省雇用均等・児童家庭局通知）別添

<参考文献>

- 1) 水流寛二 2005 「地域子育て支援事業と授業の融合～レクリエーション・インストラクター養成と絡めて～」全国保育士養成協議会第44回研究大会 研究発表論集
- 2) 植田明ほか 2005 「地域における子育て支援に短期大学が果たす役割について－その方法と実践－」全国保育士養成協議会第44回研究大会 研究発表論集
- 3) 小川清美 2005 「児童学からの出発 地域・子ども・大人の『関係をつなぐ』、－東横学園女子短期大学子育て支援センター『ぴっぴ』の取り組み－」(1)～(3)、日本幼稚園協会「幼児の教育」第104巻第9～11号
- 4) 古橋紗人子・早川滋人 2006 「養成校における地域子育て支援－学内活動の実践と展望－」全国保育士養成協議会第45回研究大会 研究発表論集
- 5) ト田真一郎ほか 2006 「短期大学における子育て支援事業の検討～プログラム内容の可能性について～」全国保育士養成協議会第45回研究大会 研究発表論集
- 6) 福井逸子ほか 2009 「『子育て支援力』育成のための保育士養成教育に関する研究(1)」北陸学院大学・短期大学部紀要(1)
- 7) 立浪澄子 2009 「養成段階で子育て支援に必要な資質と専門性の基礎を育てる－試み(二) 学生主体による『もちっこ広場』の実践的研究を通して」日本保育学会第62回大会発表論文集
- 8) 福井逸子ほか 2010 「『子育て支援力』育成のための保育士養成教育に関する研究(2)」北陸学院大学・短期大学部紀要(2)
- 9) 小川千晴 2010 「親子交流による学生の学びと気づき－子育てひろばにおける実践から－」全国保育士養成協議会第49回研究大会 研究発表論集
- 10) 豊田典子 2010 「『遊び力』育成のための取組実践からの考察－NPO法人『キッズぽてと』と『総合演習』の相互支援を通して－」全国保育士養成協議会第49回研究大会 研究発表論集